



Title	野生生物による食害防止についての取り組み
Author(s)	和田, 信一; 榎本, 浩志; 芦谷, 大太郎 他
Citation	北方森林保全技術, 第24号, 30-34
Issue Date	2006-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73110
Type	departmental bulletin paper
File Information	2005-24_1-5.pdf



I-5 野生生物による食害防止についての取り組み

和歌山研究林 和田 信一
榎 本 浩志
芦 谷 大太郎
久保田 省 悟
前 田 昌 作
土 井 一 夫
大 西 一 弘
前 田 純
野 田 真 人

はじめに

和歌山研究林（以下、研究林）では、ニホンジカ（以下、シカ）による植栽苗木の食害対策として、柵の設置をはじめ、防止に関する取り組みを行ってきた。しかし、近年まで大きな被害がなかった竹林においてもニホンイノシシ（以下、イノシシ）と思われる新たな食害が生じている。このような被害の拡大は、研究林が位置する平井地区や苗畑のある大川地区も同様で、農作物への被害が地域の深刻な問題となっている。

当研究林は、里山に隣接して森林管理を行っていることから、シカの食害防止の取り組みに加え、イノシシやニホンザル、タイワンザル（以下、サル）などによる農林産物の食害防止対策を試みた。本報告では、被害状況や柵の設置などの取り組みを紹介するとともに、今後の問題点について述べる。

食害防止の取り組みと結果

研究林内の竹林でもタケノコの食害が拡大し、被害の状況調査を行った結果、イノシシの足跡や掘った痕跡が見られた。そのため 16 林班の竹林（図-1 の A1）には、被害軽減のため除間伐材を利用したイノシシ用防止柵を設置した。さらに、対岸の 7 林班の竹林（図-1 の A2）には、防除方法の違いによる食害防止効果を比較するため、市販のイノシシ用食害防止ネットを設置した。

また、大川苗畑ではサルによる被害が確認されたことから、サル用の食害防止ネットを設置した。

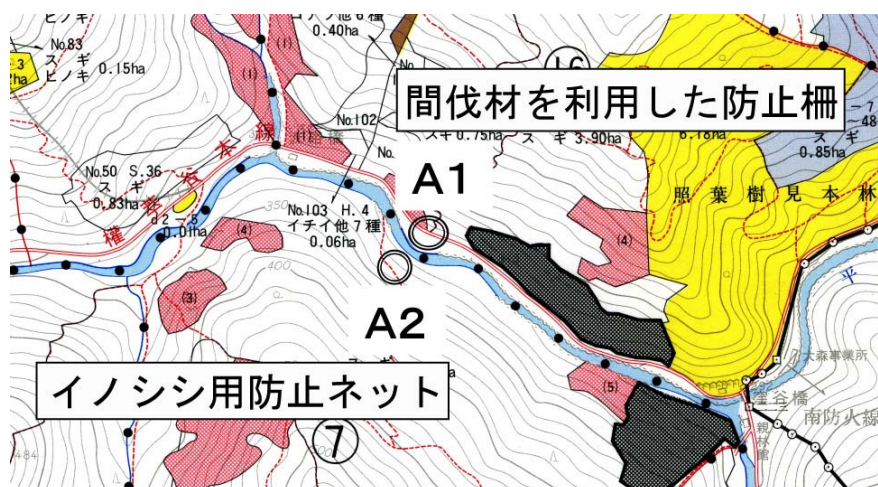


図-1 設置箇所

1) 16 林班に設置したイノシシ用防止柵について

近年まで 16 林班のタケノコの食害は、それほど深刻ではなかったが、ここ数年は地表に現れる前のタケノコをイノシシがすべて食べ尽くすため、新規のタケが更新されない状態になった。従って、竹林が維持できる程度の、タケの更新補助を目的として、食害防止柵の設置を 2004 年 9 月に行った。

防止柵は、立杭を打ち込み、その杭に除間伐材を製材して作った板を打ち付ける構造である。高さはシカによる侵入も考慮し

て約 2 m とし、木材の腐朽を防ぐために防腐剤を塗布した（写真－1）。柵は竹林を囲う周囲長約 67m である。2005 年 1 月に柵の点検を行ったところ、地際に掘削跡を発見したことから、掘削による侵入を防ぐために丸太や石積みによって柵の地際を補強した。その結果、イノシシの侵入を防止することができた。なお、この作業の製材・設置は約 30 人工で完成した（写真－2）。

同年、5 月 16 日の調査では 132 本のタケノコの発生が確認され、イノシシからの食害を防止する当初の目的は達成することが出来た。しかし、数日後には、新たな食痕が確認された。サルが柵から逃げるところを頻繁に確認しており、2 箇所から柵をよじ登ったような足跡を発見したため、柵内に 2 台のセンサーカメラを設置したところ、写真－3 のように多くのサルが確認された。発生が確認された 132 本のタケノコのうち、タケまでに成長した個体は 16 本であった。柵内への経路としては、柵をよじ登るほかには、近くにあるスギの木から飛び移った可能性もある。



写真－1 防護柵設置作業



写真－2 防護柵全景



写真－3 サルの群れ

2) 7 林班に設置した食害防止ネットについて

7 林班の設定は、市販のイノシシ用防止ネットの効果を比較検討するためである。ネットは高さが 1.8m、長さが 40m である。設置には、ネットを固定するための立杭だけで、少人数で容易に設置（写真－4）することができる。

しかし、ネットの下からイノシシの侵入が認められ、応急措置として周囲に石を置いた。侵入原因は、設置部分が川岸の大きな石による凹凸のため、ネットの裾が地表との接地が充分でないためと思われる。応急処置後、タケノコの成長が見られた事からイノシシによる侵入を部分的に防ぐ事は出来た。しかし、その後 16 林班に設置した防止柵と同様サルには侵入された(写真－5)。



写真－4 防止ネット



写真－5 サルによる食害

3) 大川苗畑に設置した簡易猿害防止柵について

大川苗畑は事務所が所在する平井地区より 13km ほど川下に位置する(図－2)。大川苗畑は敷地内に(約 1 ha) 苗畑、樹木園、採穂園が設定されている。近年この大川地区でも、庭や田畑などにサルやイノシシが出没し、果樹や農作物の被害が拡大している。研究林の苗畑にあるクリノキにもサルが現れるようになり、その対策としてサルネットと言う網を使用した簡易猿害防止柵「猿落君」²⁾を設置した。

この猿落君は奈良県果樹振興センター鳥獣害対策チームで考案されたもので、サルが柵に登ると支柱が曲がって落ちる仕掛けである。設置は 2005 年 9 月 16 日、学生実習として行った。この猿落君の周囲長は、約 57m である。その中にはクリノキが 4 本、カキノキが 2 本植えられている。

猿落君の設置は以下の通りである。

- ① 周辺の木から猿の侵入を防ぐために周りの木の剪定や伐採。
- ② 設置箇所を決めトラロープを張り、そのトラロープをペグで固定(写真－6)。
- ③ 長さが 1.5m の支柱となる鉄パイプを約 2 m 間隔で、地上高約 1.3m になるよう打ち込む。
- ④ ③の杭を補強する横バーは地上高



図－2 大川苗畑位置図

約 70cm の所で固定（写真－ 7）。

- ⑤ 長さが 2m70cm のダンポールを支柱用鉄パイプに 2 本ずつ差し込んでいき、そのダンポールの先にサルネットを挟み込んで、ネットが動かないようビニールテープで固定（写真－ 8）。
- ⑥ 横バー・トラロープに結束バンドを使用してサルネットを固定。
- ⑦ 最後に、出入り口のドアを作製（写真－ 9）。

猿落君は設置するためのコストが低く、脚立などを特別に用意しなくても設置が可能であった。資材は、サルネット、ダンポール、トラロープ、ペグ、結束バンドのみを購入し、支柱用鉄パイプ、横バー用鉄パイプ、フックバンドは古いビニールハウスの資材を再利用した。

2005 年秋は、山にシイやカシなどのドングリが豊作であったためか、近隣の田畑にもサルによる被害が少なく、食害の防止効果は確認できなかった。



写真－ 6 トラロープをペグで固定



写真－ 7 支柱と横バー固定



写真－ 8 ダンポールとネットを固定



写真－ 9 「猿落君」完成

今後の課題

- ・ 16 林班（図－ 1 の A 1）の竹林に設置した間伐材の防護柵は、当初の目的であったイノシシによる食害を防ぐ事はできた。しかし、新たにサルによる食害が生じたことから、今後はサルが侵入すると思われる柵周辺の足場となるタケやスギの伐採および柵を登りづらくする構造に改良をする必要がある。
- ・ 7 林班（図－ 1 の 6 A 2）に設置したイノシシ用の防止ネットは、イノシシやサルに侵入さ

れてしまったため、今後、イノシシに関しては、ネットの裾に杭を打ち込んで固定するなどの改良が必要である。この竹林は、サルの侵入を防ぐ事が困難な地形であり、今後、竹林の取扱いの再検討が必要であろう。

・大川苗畑に設置したサル用防止ネットについては、サルの出現が見られなかったことから、今回の調査では食害防止効果は確認されなかった。次年度も継続して試験を行う予定である。

まとめ

野生動物による食害については、農村地域だけに限らず、都市部近郊でも大きな問題となっている。現在、一般的な防除対策法として、食害防除用ネットが販売され、利用されているが、その設置は個々に行われており、対策が行われた場所は食害が軽減するものの、隣接する田畑では依然として食害が続く状態の繰返しである。根本的な食害防止対策は、個々の努力に加え、地域全体で協力して組織的に取り組んでいく必要があると考えられる²⁾。

当研究林としては、今後も地域の方々とともに協力し合い、食害防止に関する取り組みを進めていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 榎本浩志・大西一弘・青井俊樹（2000）：野生動物の生息環境としての針葉樹人工林の質的改善に関する研究－間伐遅れ林分の再生と野生動物との共存方法の開発－，北方森林保全技術，18，24-27
- 2) 井上雅央（2002）：山の畑をサルから守る－おもしろ生態とかしこい防ぎ方－，社団法人農山漁村文化協会，70-80